

児童のための読書施設のあり方*

Reading Facilities for Children

——読書と読書施設に関する意識調査から——

小林 玲 子

Reiko Kobayashi

Résumé

This paper presents a study on libraries for children. The role of reading in childhood as a positive influence on character molding has been recognized and various reading facilities for children have been established in Japan.

The author made a survey on schoolchildren's opinions of reading and reading facilities. The investigation revealed that if books were at hand, children would read them and if reading facilities were located nearby, children would use them. On the basis of these findings, the author made suggestions on improving present children's libraries and proposed for establishing an unified district library network.

- I. はじめに
- II. 我が国の児童の読書環境と読書の実態
 - A. 児童のための読書施設
 - B. 児童の読書生活
- III. 児童の読書と読書施設に関する意識調査
 - A. 調査の目的
 - B. 調査の対象と方法
 - C. 調査対象校の概況
 - D. 調査の内容
 - E. 調査の結果と考察
- IV. 児童のための読書施設のあり方
 - A. 児童と読書施設とのかかわり
 - B. 児童のための読書施設のあり方
- V. おわりに

* 本論文は昭和55年度慶應義塾大学文学部図書館・情報学科卒業論文に基づくものである。

小林玲子：千代田化工建設(株)規格標準部資料課

Reiko Kobayashi, Information Services Section, (Standards & Manuals Department) Chiyoda Chemical Engineering & Construction Co., Ltd.

児童のための読書施設のあり方

I. はじめに

読書とは、「ことば」を通して、新しい体験をすること¹⁾である。読書によって、実生活の中での経験に、さらに別の精神的な経験を加えて、幅広く充実した人生を楽しむことができる。この意味で、児童期における読書は、人間形成に多大な影響を与えと言っても過言ではない。また、読書能力・読書興味を育て、読書習慣を形成し、生涯にわたる自己教育(生涯教育としての読書)のための基礎作りがなされるのも、児童期において他にはない。

子どもは、誰もが読書を楽しみ、読書を好きになる可能性を持っている。その可能性を引き出し、伸ばしていくためには、子どもが自由に本に接し、読書を楽しむことのできる、良い読書環境が不可欠である。子どもにとって、「読書は楽しい」と幾度言われることよりも、実際に楽しませてくれる1冊の本に出会うことの方が、はるかに重要である。このような本との出会いを保障し、読書の機会を守ることが必要なのである。

我が国では、近年ようやく子どもの読書に対する社会的関心が高まり、児童期の読書の重要性が認識されるようになった。それに伴って、児童のためのさまざまな読書施設が生まれ、児童のさかんな利用に支えられて発展してきた。しかし、急激な発展の陰で、しばしば思わぬ所にひずみが見られることは否定できない。

従来、児童のための読書施設が図書館論の中で取り上げられることは少なくなかったが、その大半は、図書館の側から見た、大人の目から見た児童のための読書施設論であり、個々の読書施設における奉仕論に終始していた。

そこで本稿では、児童の読書に対する欲求の実態に基づき、児童の立場から見た児童のための読書施設、読書環境のあり方を考えてみたい。

II. 我が国の児童の読書環境と読書の実態

A. 児童のための読書施設

現在、我が国には、児童のための公的な読書施設として、公共図書館、学校図書館、児童館図書室、コミュニティ図書館、地域・家庭文庫などがある。

『日本の図書館1980』によれば、1980年3月31日現在、公共図書館総数は1,320館、それに対して、児童室・児童コーナー数は953、設置率72.2%である。²⁾ 1965年に公共図書館総数773館、児童室・児童コーナー数280、設置

第1表 市区立図書館における児童奉仕

	総 数	児童奉仕の占める割合
蔵 書 数	4,905(万冊)	26.0(%)
館外貸出登録者数	658(万人)	46.0(%)
館外貸出冊数	11,465(万冊)	51.3(%)

出典：日本の図書館1980. p. 18.

率36.2%であったのと比較すると、設置率は約2倍になっている。³⁾ また、市区立図書館に限って見ると、総数876館に対し、児童室・児童コーナー数は715、設置率81.6%である。そして第1表からわかる通り、蔵書全体に占める児童書の割合が少ないにもかかわらず、公共図書館の利用者の半数が児童なのである。これら児童奉仕のめざましい進展は、1970年、『市民の図書館』において、児童奉仕の重要性が明確にされ、市町村立図書館の運営の中心としてはっきりと位置づけられ、その活動の方向が示されたことが、大きく寄与したと言える。⁴⁾ しかし、今なお、図書館を設置していない市区が19.0%、町村に至っては87.2%もあり、図書館があっても児童室がない、児童奉仕担当者がいないなど、問題は多い。⁵⁾

学校図書館は、「学校教育課程の展開に寄与するとともに、児童又は生徒の健全な教養を育成する」⁶⁾ことを目的として、その設置が義務づけられており、児童にとって一番身近な読書施設と言える。公共図書館が地域の不特定多数の児童を対象とするのに対し、学校図書館はその対象が限定され、しかも一定期間全ての児童が生活する場にあるという点に大きな違いがある。その実態は、全国学校図書館協議会の調査によれば、小学校図書館では、専用(他の教室と独立している)の図書館(図書室)を持つものが93%で、閲覧室は平均97.4m²、1教室強の広さである。蔵書冊数は4,000～6,000冊の学校が全体の約3分の1で、1校平均5,078冊、児童1人当たり7.3冊である。図書館経費は、昭和53年度の1校平均が41万7,000円、その内訳は公費24万円、私費17万7,000円である。校務分掌による図書館担当教員は1校平均2.4人であるが、学校司書の配置状況は25.3%と極めて低く、そのうち私費採用も少なくない。⁷⁾

また、図書館法に基づかない公立の読書施設として、児童館図書室、コミュニティ図書館などがある。

児童館は、児童厚生施設として地方自治体が自主的に設置するもので、最低基準でここに図書室を設けること

が規定されている。児童館そのものが「児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、又は情操をゆたかにすることを目的とする」⁸⁾ものであるため、図書室の活動はそれを反映し、ここでは読書も「遊び」の1つとしてとらえられているようである。

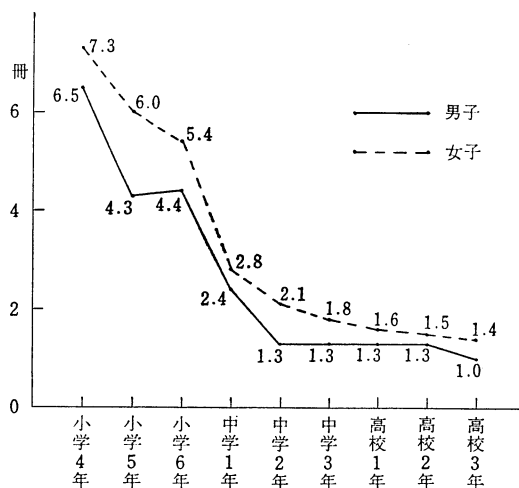
コミュニティ図書館は、一般に、地方自治体が、「コミュニティ構想」に基づき、住民の自主的な地域活動を啓発し育成する目的で、その拠点として設置する「コミュニティ施設」(コミュニティ・センター、市民センター、地区センターなど、その名称はさまざまである。)の中に、活動の一環として設けられるものである。コミュニティ図書館は、多くの場合、社会教育行政下の公共図書館とは無関係で、一般行政部局(企画、広報、市民など)の管轄下にあり、施設、資料費、運営費は自治体が提供し、管理・運営は地域住民に任せるという、公立民営の形をとる。住民の図書館要求の高まりから、近年各地で増えてきており、児童の利用もさかんである。⁹⁾

地域・家庭文庫は、公共図書館の絶対的な不足から、市民が自発的に運営し活動している、法的根拠をもたない読書施設であるが、昭和40年代から急増し、現在、全国で3,000とも4,000とも言われている。地域・家庭文庫の特質は、奉仕対象が少なく範囲が限られていて、くつろいだ家庭的雰囲気の中で、暖かいきめ細かなサービスが行われることである。しかし、財政難をはじめ、人手不足、技術、施設・設備にかかわる問題など、その性格上解決の困難な種々の問題を抱え、存続の不安定なものとなっている。¹⁰⁾

B. 児童の読書生活

以上のような環境の中で、児童はどのように読書をしているのか、その実態を「学校読書調査」から探ってみたい。¹¹⁾

まず、1ヶ月間の読書量(5月1ヶ月間に読んだ本の冊数。マンガ、雑誌を除く。)は第1図の通りである。読書量は学年が進むにつれて減少する傾向にあり、また、どの学年も男子より女子の方が多い。これらは毎年見られる傾向であるが、1980年の調査では、前年に比べて全般的に読書量が増えている。とは言っても実際には個人差が大きく、読んだ本の冊数の内訳をみると、0冊(5月1ヶ月間に1冊も読まなかった)を含めて3冊以下の者が、男子では半数、女子は3分の1を占めている。1ヶ月間に1冊も本を読まない者(しばしば「不読者」と称される)の割合は、10年来、特に男子において増え続け、1978年には20.1%にもなっていたが、1980年に一挙



第1図 1ヶ月間の1人平均読書量

出典：学校図書館速報版 no. 944, 1980, p. 1.

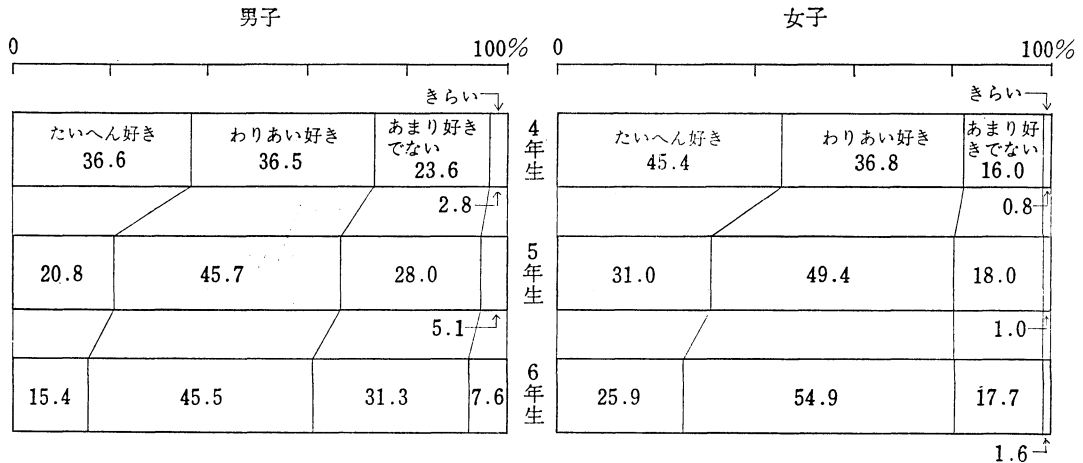
に10%以下に減ったことは、読書量の増加と並び注目すべき現象である。これらは、小学校の授業の中で「読書の時間」「図書館の時間」が定着してきたことを示すものであろう。内容はともかく、読んだ本の冊数から見る限り、児童の「読書離れ」にいくらかストップがかかったと言えるのではないだろうか。

それでは、読書の内容はどのようなものであろうか。5月1ヶ月間に読んだ本の書名を見ると、圧倒的に伝記が多く、上位17点のうち約3分の1を占めている。男子は、伝記に次いで多いのが探偵・推理もののシリーズ、その他科学読物、趣味の本など、幅広い分野にわたっている。これに対して女子は、『若草物語』、『赤毛のアン』シリーズなどの外国の古典・名作文学が中心である。男女を通じて、新しい創作文学は少なく、例年、マスコミ、特にテレビの影響がはっきりとあらわれるのが特徴である。

次に、1ヶ月間に読んだ雑誌の冊数は、最も多いのが6年生男子の10.1冊、少ないのは4年生女子の4.9冊で、本の場合とちょうど逆に、高学年の方が、また男子の方がよく読んでいる。よく読まれているのは、マンガ誌と学年別学習雑誌である。

読書に対する意識については、第2図のような結果が出ている。学年が上がるにつれ「たいへん好き」が少なくなり、また女子の方が「たいへん好き」が多く、読書量・意識の両面から、女子の方が読書好きであることが明らかになっている。マンガについては、「たいへん好

児童のための読書施設のあり方



第2図 読書の好き嫌い
出典：読書世論調査 1980年版

き”“わりあい好き”を合わせると男女とも85%になり、一般の読書を大きく上回る。そしてこれは高学年男子ほど高い。また、“気楽に読めて楽しい本”と“少しむずかしくても、よく読むとおもしろい本”との比較では、4年生は後者の好きな者が52.8%でわずかに多いが、6年生になると前者の好きな者が54.0%になる。中・高校生の軽読書化傾向（高校1年生では前者が74.7%）が早くも小学校にまで及んできているわけで、高学年になるほど雑誌をよく読み、マンガが好きであるという前述の事実と付合する。

読書の目的は、“楽しみを得たいため”が45.2%、“ひまつぶしをするため”が37.6%と多く、“勉強の気晴らしに”“新しい知識を得たいため”各17.8%と続き、ここからも娯楽中心の読書であることがわかる。読書の動機は、“書名がおもしろそうだから”が51.9%と群を抜いており、他に、4・5年生では“昔から有名な本だから”“家の人にすすめられたから”、6年生では“友だちにすすめられたから”が、それぞれ20%前後である。“テレビ・ラジオ・映画でやっていた”が各学年とも男子に多いことも見逃せない。そして、そのような本の入手方法は、“学校図書館などで読んだ”が各学年70%前後で、“家の人に買ってもらった”“家にあった”と続いている。

また、児童の家庭での1日の生活時間の中で、読書時間の占める割合を見ると、“本や雑誌・新聞などを読んだ”のは平均24分で、“テレビを見たり、ラジオを聞いた”の107分と比べると、4分の1にもみないという結果になっている。

次に、他の読書調査、図書館利用者調査を見てみたい。主な調査の概要は第2表に示す通りであるが、それらの結果をまとめると、以下のような点が明らかになってくる。¹²⁾

(1)読書量は小学校3・4年生が最も多い。(高知、日野調査)(2)高学年になるほど学校図書館、公共図書館などの読書施設をよく利用している。(高知、日野、天白調査)(3)学校図書館の利用度は非常に高いが、学習のための利用はそれほど多くはなく、その実態は自由読書の場となっている。(高知調査)(4)公共図書館の存在、そのサービス活動は、児童の利用に敏感に反映する。(日野、名古屋、天白調査)(5)公共図書館の利用圏域は数百メートル、15分以内が約7割で、徒歩か自転車での来館が多い。(高知、杉並、天白調査)(6)公共図書館へ行かない理由は、最も多いのが“図書館が遠い”で、高学年では“塾やおけいこで行く時間がない”、低学年では“つれて行ってくれる人がいない”が多い。(名古屋、天白調査)(7)児童の読書意識、図書館利用は、親のそれと高い関係にある。(名古屋、天白調査)

III. 児童の読書と読書施設に関する意識調査

A. 調査の目的

児童期における読書の意義は先に述べたが、とりわけ低学年は、読書能力、読書習慣の形成において重要な時期である。しかしながら、高学年を対象とした読書調査や図書館利用調査はしばしば行われてきたが、低学年に関しては調査が難しく、あまり行われていないため、そ

の実態ははっきりつかめていない。また、これまでの調査の多くは、単に読書傾向や特定の図書館の利用者像を求めたにとどまっていた。そこで、過去の調査結果を十分ふまえながら、今回の調査では、特に低学年児童に焦点をあて、その読書意識を探ると共に、読書施設全般にわたり、総合的に利用の実態を把握して、潜在的な需要を明らかにし、その上で、これからの児童のための読書施設の望ましいあり方、読書環境整備の新しい方向を考えることを目的とした。

B. 調査の対象と方法

調査対象：横浜市立上郷南小学校児童1～3年生各1クラス、合計119名。

調査方法：各クラスの授業時間の中、1時限を利用して、1年生に対しては、4～5名ずつのグループに分けてインタビュー、2・3年生には、同様の内容の質問票（付録参照）を配り、逐一設問を読みあげ、説明を加えてから、その場で一斉に回答を記入してもらい、回収した。

調査日時：1980年6月30日月曜日、第1、4、5校時。

C. 調査対象校の概況

横浜市では、住民の急増に比べて公共図書館の整備が非常に遅れているために、全国でも特に地域・家庭文庫が多い。中でも最も文庫数が多く、活動がさかんに行われているのが戸塚区である。上郷南小学校は、その戸塚

第2表 児童を対象とした過去の図書館利用調査の概要

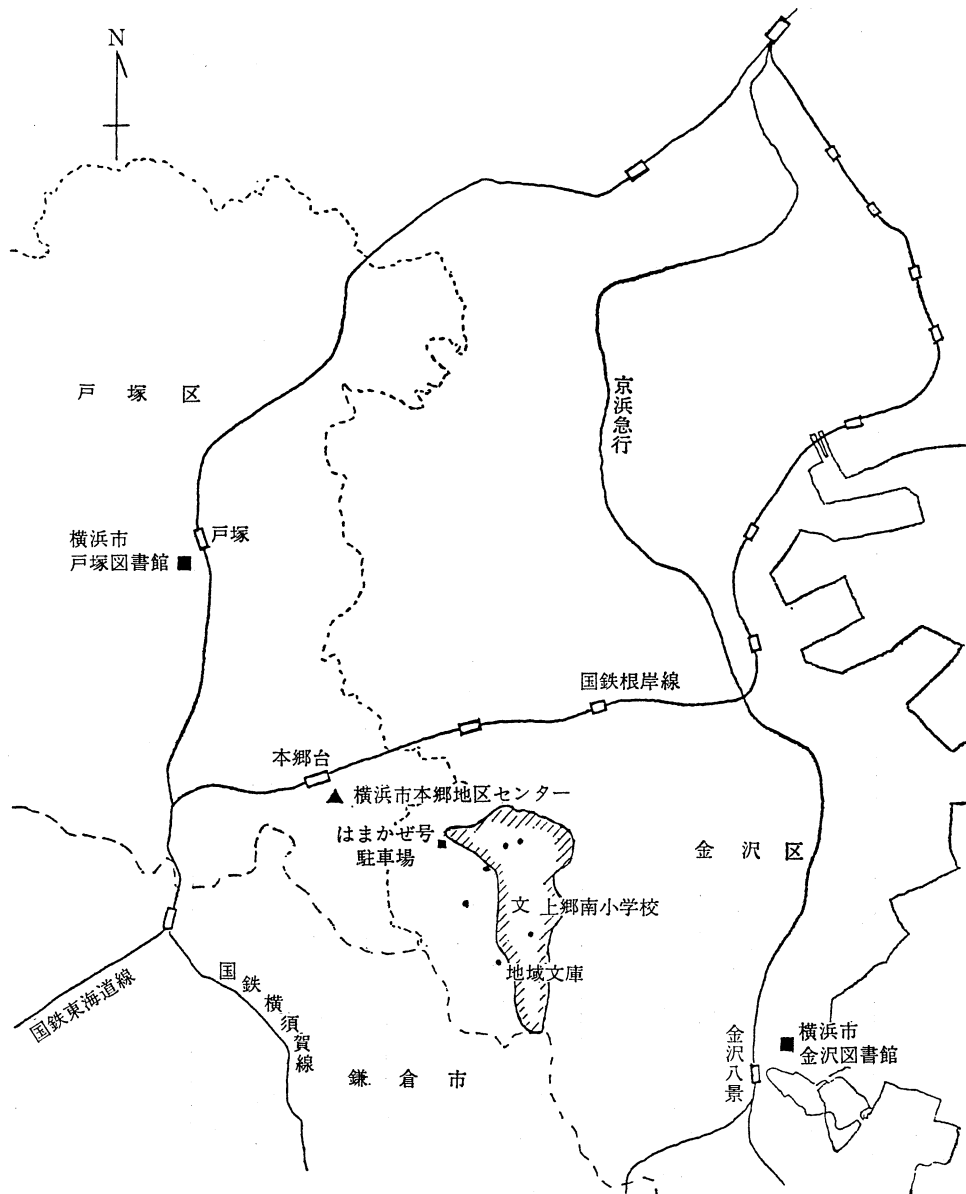
タイトル	調査者	調査時期	調査目的	調査対象	調査方法	サンプル数
児童の読書形態と図書館利用	栗原 嘉一郎 他	1966年 10～11月	高知市における図書館計画の基礎資料として、児童の読書需要・読書形態を把握し、利用圏域をとらえる	児童調査 高知市内の小中学校各3校の各学年1クラス	教員の指導下における調査票記入	1,121
				来館児調査 高知市民図書館本館、3分館の児童室への全来館児	館員の指導下における調査票記入	534
日野市の図書館設置計画に関する研究	栗原 嘉一郎 他 (日野市、日本図書館協会より委託)	1969年11月	日野市における公共図書館の設置計画に関するマスター・プランの作成	日野市内の小学校2校の3～6年生 中学校2校の各学年各1クラス	教員の指導下における調査票記入	547
杉並区立図書館登録者についての調査報告書	市民施設研究会	1973年3月	市民集会施設についての調査の一環	杉並区立図書館館外貸出登録者から無作為抽出	自宅で面接調査	597
名古屋市における読書と図書館に関する調査報告書	名古屋市鶴舞中央図書館 藤谷 幸弘 他	1975年2月	新しい図書館計画のために地域社会における読書環境を把握する	名古屋市守山区・中村区・瑞穂区内の小学校23校の3年生各1クラスの児童とその両親	自宅で調査票記入	887 (親 1,645)
天白図書館と地域社会	「天白調査」調査研究チーム	第1次 1977年7月 第2次 1978年7月	今後の名古屋市における公共図書館サービスの新しい展望を求める	名古屋市天白区内の全小学校の2・3・5年生、全中学校の1・2年生各1クラスの児童生徒とその両親	自宅で調査票記入	3,406 (親 5,690)

児童のための読書施設のあり方

区の南部，上郷町に造られた大きな新興住宅地の中の一画に，1979年4月に開校した。現在は，27学級，児童数1,085名である。

学校図書館は，校舎の1階のほぼ中央にあり，閲覧室は広さ128m²（普通教室2部屋分），収容人数48名である。1980年度の図書費（予算）は81万4000円であるが，

開校後間もないため，蔵書はまだ2,000冊ほどしかなく，館外貸出は行われていない。従って，図書室の利用は室内での読書に限られる。開館時間は，毎日20分の休み時間と昼休みだけで，図書委員の児童が当番になっている。図書室担当教員は，校務分掌による図書係が5名いるだけで，司書教諭，学校司書はいない。



第3図 上郷南小学校周辺の読書施設

各クラス毎に、週1回図書室を利用する時間があり、学級担任の計画によって、自由に読書をしたり、利用指導を行ったりすることができる。

また、ほとんどのクラスで、児童の持ち寄りによって60～70冊程度の学級文庫を作っており、貸出をしているクラスもある。

学校図書館以外に、児童が利用可能な読書施設としては、横浜市戸塚図書館、金沢図書館の2つの公共図書館がある。戸塚図書館は、同じ戸塚区内ではあるが生活圏が全く異なり、バス又は電車を乗り継いで行かなければならず、図書館側のサービス対象地域にも入っていない。金沢図書館は、1980年5月に開館したばかりの、蔵書4万5000冊（3年間で12万冊に増冊の予定）の大型館である。上郷町内からはバスで約20分、終点の京浜急行線金沢八景駅から徒歩7、8分の所にある。また、学区の北のはずれの児童公園が横浜市図書館の移動図書館「はまかぜ号」の駐車場になっており、月2回巡回している。他に、本郷台の本郷地区センターの中に図書室（いわゆるコミュニティ図書館）がある。

地域・家庭文庫は、学区内に、神奈川県立図書館、横浜市図書館の団体貸出の登録をしているものがそれぞれ1つずつあり、他にも自治会館、集会所などを利用した子ども文庫がある。（第3図参照）

児童の家庭環境は一般に恵まれていて、親の学歴も高く、90%以上がホワイトカラーで、児童の知能のレベルも普通の学校と比べてかなり高い。

以上のように、ある意味では極めて特殊な状況の下に

あると言えるだろう。

D. 調査の内容

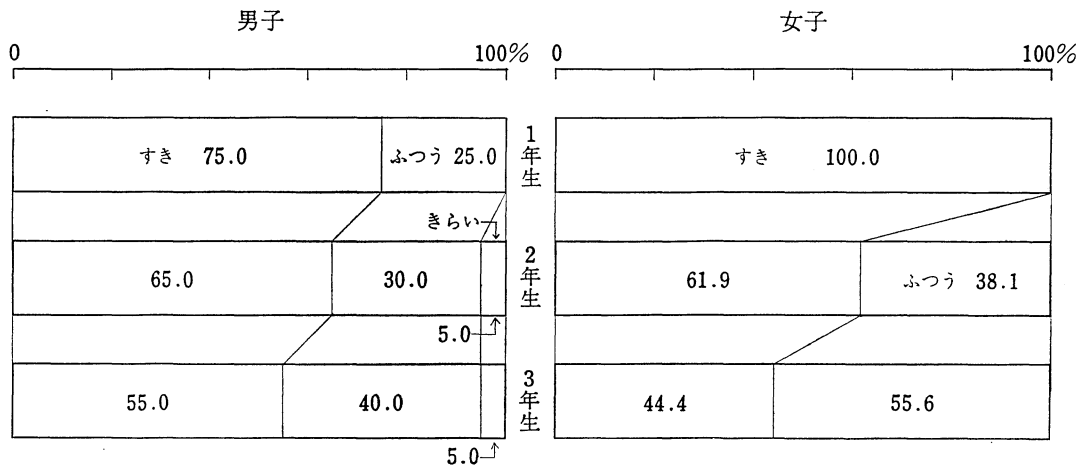
質問は以下のような構成になっている。（付録、質問票参照）

まずはじめに、簡単に読書と読み聞かせ・お話の好き嫌いについて尋ね、調査への導入とした。次に、本の入手方法、学校図書館及び公共図書館の利用状況、最後に図書館への要望を聞いた。低学年では、これだけの質問量が限界であろう。

質問の形式は、過去の調査の結果との比較可能な要素を残しながら、低学年児童にも十分理解でき、回答できるように、わかりやすく単純な形に工夫し、担任の先生方のアドバイスをとり入れて決定した。例えば、本の入手方法についての質問の場合、多くの選択肢をあげ、その中から3つを選び出す形式は、低学年には無理であるため、方法を1つずつあげて、それぞれについて“よく読む”“時々読む”“読まない”の3つの中から選択する形をとった。また、その頻度についても、週に何回、月に何回という概念はまだ理解できないので、やむを得ず本人の主観による判断に頼ることになってしまった。学校の図書室で読む本、金沢図書館へ行かない理由など、選択肢の多いものは全て複数回答とし、あてはまるもの全部に印をつける形とした。このような形式の調査の結果として、データの不十分な相互比較の難しいものになってしまったことは否めない。

E. 調査の結果と考察

1. 読書、読み聞かせ・お話（質問1）



第4図 読書の好き嫌い

児童のための読書施設のあり方

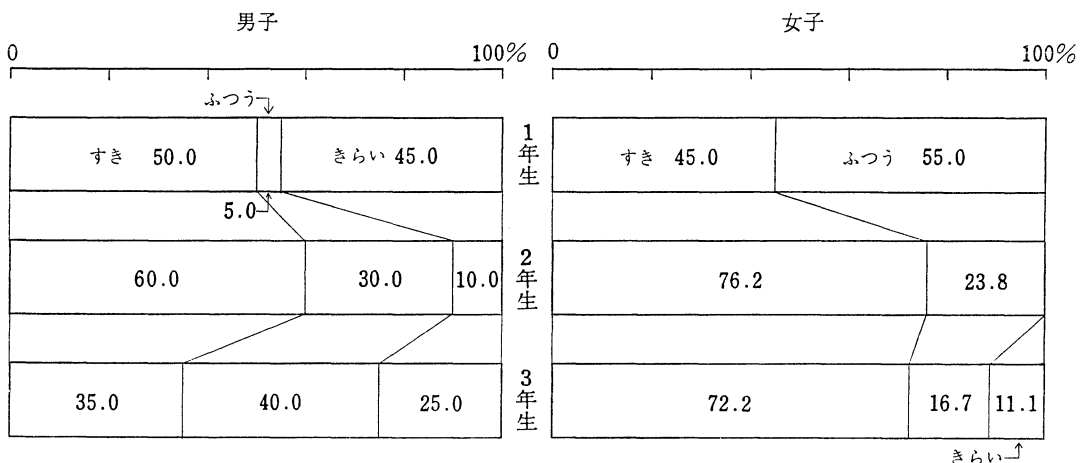
まず、読書(マンガ・雑誌を除く)、読み聞かせ・お話それぞれについて、好ききらいをたずねた。読書が“好き”と答えた者が3年生女子を除いて半数を超え、“きらい”とはっきり答えた者は男子にごくわずか(実数各1)いるだけである。(第4図参照)最近の子どもは本を読まないと言われるが、この結果を見ると、必ずしも読書がきらいなわけではなく、何らかの理由で読まない、あるいは読めないのではないと思われる。しかし、“好き”が男女とも学年が進むにつれて減少しており、特に女子は、1年生で100%であったのが、3年生では44.4%と大きく落ち込んでいることは注意を要する。この傾向は、「学校読書調査」において、4～6年生にも顕著に見られるもので、読書離れが予想以上に早い時期に始まっていることを示すものではないだろうか。また、男子よりも女子の方が読書好きであることが「学校読書調査」で出ているが、これはこの調査においては、1年生以外は当てはまらないようである。

読み聞かせ・お話は、学年、男女によりばらつきがあり、読書の場合ほど明らかな傾向は見られない。(第5図参照)2・3年生の女子以外は、“好き”の割合が読書よりも低く、また“きらい”が多くなっている。特に男子では、1年生の30%、2・3年生でも各10%が読書は“好き”だが、読み聞かせ・お話は“きらい”と答えている。さらに、読書か読み聞かせ・お話のどちらかを“好き”と答えた者が1・2年生では90%以上であるのに対して、3年生になると65.8%になり、どちらも“きらい”な者が現われる。テレビ・ラジオなどの受身の環境の中

で育ってきた子ども達は、読書よりも読み聞かせやお話の方を好むであろうと予想していたのだが、大きくはずれてしまった。これは、ちょうどこの時期が、字が読めるようになって、自分で読んだ方がおもしろい(本の字を読むこと自体が楽しい)と感じられること、また、3年生にもなると読書の楽しみがわかりかけて来て、逆に、読んでもらうことは“幼稚っぽい”と思っていることなどの理由が考えられる。けれども、読み聞かせやお話は、字の読めない幼児に対してのみ行われるものではなく、自分で本を読める者にとっても、十分楽しむことができ、それなりの効果、意義のあるものである。おそらく、これらの児童は、まだ、興味を起こさせるような、おもしろく魅力のある読み聞かせやお話に出会った経験がないのではないだろうか。読み聞かせやお話をする側にも問題があるように思われる。

2. 本の入手方法 (質問2)

第6図は、児童がどこから本を手に入れて読んでいるかを表わしたものである。全体を通してまず第一に言えることは、学級文庫の利用度が非常に高いことである。“よく読む”“時々読む”を合わせるとほぼ100%になり、また、“よく読む”者の割合が、6種類の方法の中で、2年生男子を除いて最も高い。これは、本が身近にあれば子どもは皆本を読むということを実証するものである。全体的に見ると、“学級文庫”“買ってもらう”“学校の図書室”“友達”“自治会の文庫”“移動図書館”の順に利用が多く、やはり身近な所から本を手に入れていることがわかる。“よく読む”と答えた者の割合だけを見ると、



第5図 読み聞かせ・お話の好ききらい

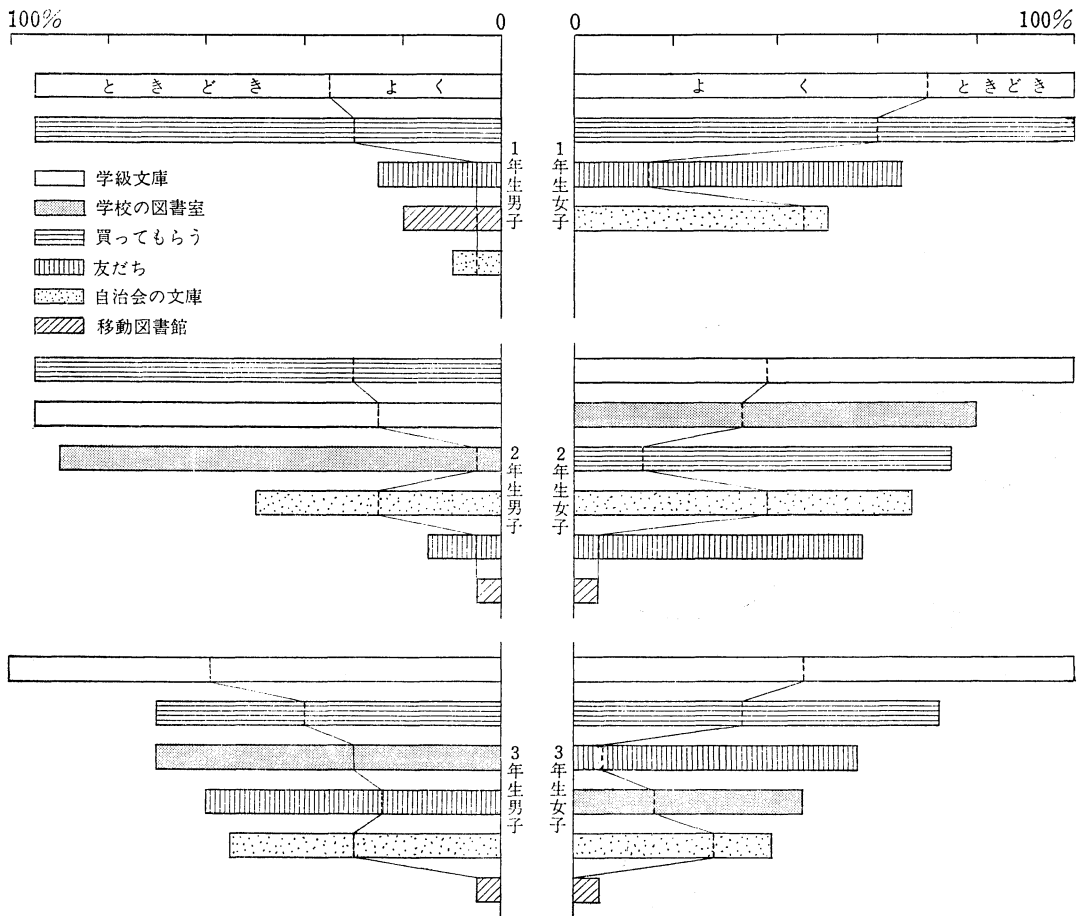
“学級文庫” “買ってもらう” の次に “自治会の文庫” “学校の図書室” “友達” “移動図書館” と続き、少し順位がかわる。移動図書館は、その存在はかなり知られているようだが、駐車場所が学区のはずれにあるためもある、実際に利用している者は少ない。

学年別に見ると、1年生では “学級文庫” と “買ってもらう” が中心である（なお、学校の図書室については、この調査を実施した時点では、1年生にはまだ読書の時間以外に利用することを指導していないため、この質問からはずした。）のが、2・3年生になると “買ってもらう” が減り、入手方法がバラエティに富んできて、活発にいろいろな所から借りて読んでいることがわかる。これは、過去の調査の結果にもあらわれていることで、児童の興味の広がり、活動範囲の広がりを反映しているよ

うにも思える。

次に、男女別では、一般に女子の方が “友達” や “自治会の文庫” で借りる者が多い。特に “自治会の文庫” の利用度は予想以上に高く、2年生女子では66.7%にもなり、積極的な読書意欲が感じられる。その一方、3年生女子に “読まない” “借りない” 者が増えていることも事実で、読書が “好き” な者が減っていることと関係があるようだ。

さらに、質問1で読書が “好き” と答えた者だけについて、本の入手方法の回答率を見ると、“よく” が多く、また方法も多種類にわたっていることがわかった。また、“友達” “自治会の文庫” “移動図書館” の利用者はほとんどが読書の “好き” な者で、読書に対する意識がそのまま実際の行動となってあらわれていると言うことが



第6図 本の入手方法

児童のための読書施設のあり方

できる。

3. 学校図書館に対する意識（質問3）

児童が学校の図書室でどのような本を読んでいるかを調べたところ、学年、男女によりかなり大きな違いが見られ、興味深い結果が得られた。（第7図参照）まず、1年生では、“絵本”“お話・童話”“図鑑”が中心でかたよりが見られるが、学年が進むにつれていろいろなものを読むようになり、3年生になると、“お話・童話”がトップで他は50%前後ではほぼ等しい割合になり、読書興味の拡大、多様化がよくあらわれている。また、“勉強の本”が3年生になると急に増えている。1・2年生ではその種の本が少ない上に、授業で利用する機会もあまりないためであろう。

女子は、各学年とも“お話・童話”が圧倒的に多いのに対して、男子は“図鑑”“科学の本”をよく読んでお

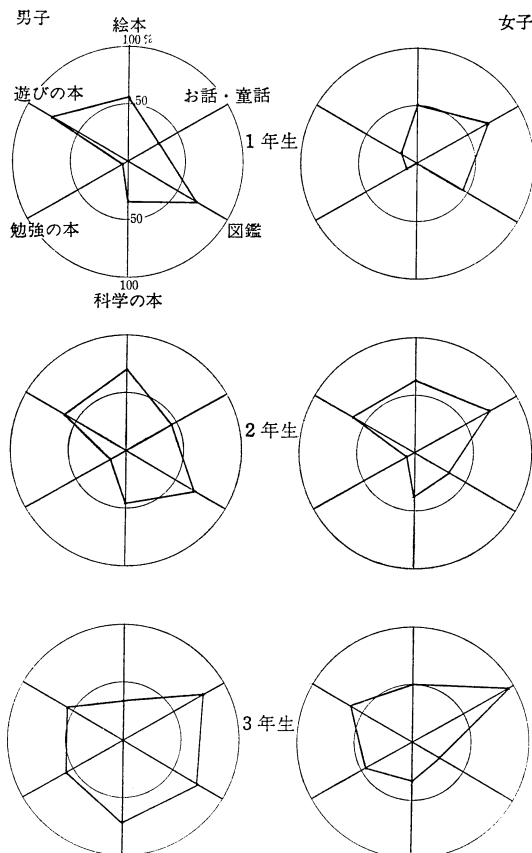
り、この時期ですでに男女差が出ていることがわかった。（1年生女子で“科学の本”が0であるのは、説明不足で、意味がよくわからなかったためではないかと思われる。それ程多くはないにしろ、幾らかは読まれているだろう。）

以上のような、学校図書館における児童の読書傾向は、過去の調査の結果に見られるふだんの読書傾向と大きな違いはない。学校図書館は、学習のための調べ読みの場、学習センターとしての機能がしばしば強調されているけれども、調査からは、児童はそのような意識を持って利用しているわけではなく、家庭や他の読書施設での読書と同じような、楽しみのための読書の場としてとらえ、利用していることがわかる。

次に、将来、学校の図書室の本の貸出が可能になった場合、それを利用するかどうかをたずねたところ、1年生の100%近く、2・3年生で共に約75%が“借りると思う”と答え、学校の図書室に対する期待が大きいことが明らかになった。一方、“借りないと思う”と答えた者は、その理由として、2年生が“学級文庫があるから”、3年生が“読みたい本がないと思うから”“学校の図書室の本はつまらないから”“学級文庫があるから”をあげている。学級文庫以外に“他の図書館で借りるから”と言う者は1人もなく、より身近な所に読書施設があればそれを利用しようとする姿勢がうかがえる。“読みたい本がない”“つまらない”という回答には、2つの背景が考えられる。1つは、本を楽しんで読めるところまで達していない、言わば“読まずぎらい”で、裏を返せば、何を読んだらいいのかわからない、自分の読みたい本がわからないということ、もう1つは、本当に本をよく読むので、3年生にもなると、図書室の少ない蔵書の中で自分の読みたい本はもうほとんど読んでしまい、もはや読書興味、読書意欲を十分に満たすことができなくなってしまうということである。早く図書室の蔵書が増し、内容豊かな魅力あるものとなることが望まれると同時に、そこで適切な指導と助言を与えてくれる人が望まれている。

4. 公共図書館に対する意識（質問4）

まず、開館したばかりの横浜市金沢図書館へ行っただけを聞いた。一般に開館直後は一時的に利用が多いものであるが、2ヶ月間で“行った”と答えたのは、119名中、1年生と3年生に2名ずつ、計4名だけで、意外に少ないのに驚いた。しかし、“行かない”と答えた者も約90%は“行ってみたい”と思っている。調査時期が夏

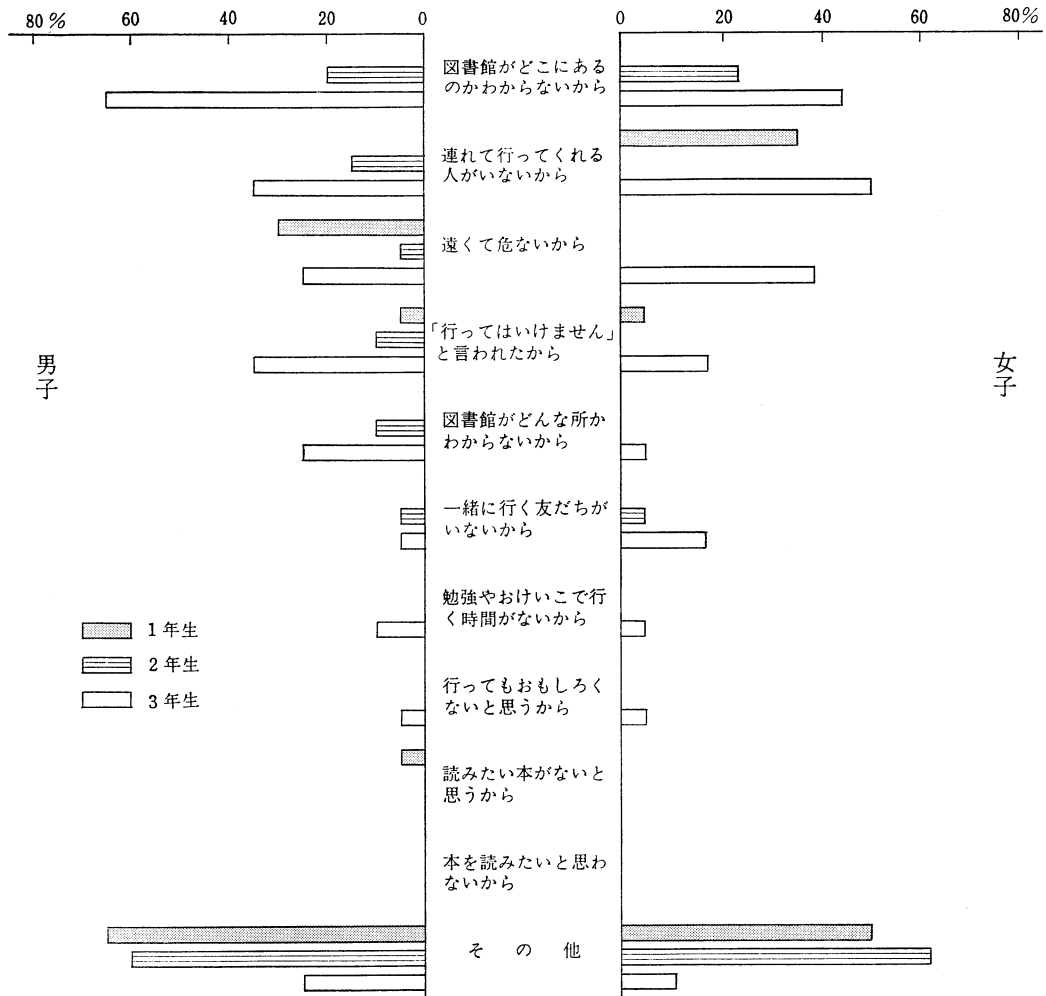


第7図 学校の図書室で読む本

休み以後であれば、もう少し行った者も多くなったのではないだろうか。

次に、金沢図書館へ行かない理由をたずねた。(第8図参照) 全体として1番多いのは“その他”で、“図書館ができたことを知らなかった”というものである。これは全く予想もしていなかったことで、(従って、質問に対する選択肢も設けていない。) 1・2年生では半数以上を占める。これでは話にならない。図書館側のPR不足としか言いようがないだろう。図書館のある金沢区では、開館前から、時折住民に対してPRが行われていたが、ここでは、区が異なり、また区内に戸塚図書館があると

いうことで、十分利用可能な圏内にありながら、ほとんどPRがされていなかったようである。他に行かない理由としては、1年生で“遠くて危ない”“連れて行ってくれる人がいない”、2年生では“図書館がどこにあるのかわからない”、3年生では“図書館がどこにあるのかわからない”に続いて“連れて行ってくれる人がいない”“遠くて危ない”となっている。また、“塾やおけいこで行く時間がない”がはじめて出てくるなど、3年生になると理由が多様化してくるのはおもしろい現象である。しかし、いずれも理由としては消極的なもので、“本を読みたいと思わない”“行ってもおもしろくない”とい



第8図 金沢図書館へ行かない理由

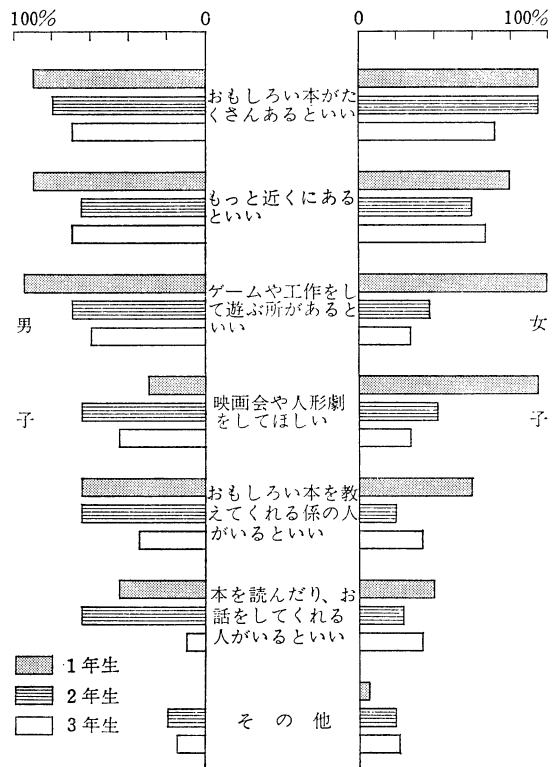
児童のための読書施設のあり方

った、読書や図書館に対して拒絶的な理由をあげる者はほとんどいない。また、“行ってはいけませんと言われた”者も多い。行き帰りの危険を案じてのことであろうが、低学年児童の場合、図書館へは、友達と一緒に行くというより、年上の人に連れて行ってもらうという意識を持っているにもかかわらず、その親や兄・姉は連れて行こうともせず、ただ一方的に行くことを禁じてしまうのは、せっかくの児童の興味をそぐことにもなりかねない。近くに、1人でも安全に行くことのできる所に図書館があれば、こういった問題は当然起きないであろう。

さらに、金沢図書館へ“行った”と答えた者に対して、その時の状況を聞いた。4名のうち、2名が兄弟、残りの2名が親と一緒にっており、その親は、子どものために、子どもを連れて行っただけで、本人は本を借りていない。これが、子どもと共に図書館へ来る親達の平均的な姿であることは、過去の調査でも明らかになっている。

“また金沢図書館に行きたいと思いますか”という質問に対しては、4名のうち3名が“行きたくない”と答え、その理由に“読みたい本がない”“行ってもおもしろくない”をあげている。新しくきれいな、広々とした明るい雰囲気のある金沢図書館に“行きたくない”とは、意外である。これはおそらく、本当に本がない、おもしろくないのではなくて、自分の読みたい本を見つけることができなかったのではないと思われる。ふだん、蔵書量の少ない学校の図書室や文庫しか利用していない者が、突然、大きな図書館へ連れて行かれても、たくさんの本の中でとまどうばかりである。開館直後でも多く、ゆっくり落ち着いて本を探したり読んだりすることが難しい場合もあるだろう。その上、回りの人は知らない人ばかりというのでは無理もない話かもしれない。けれども、“読みたい本がない”“おもしろくない”という印象を抱いたまま、それっきり図書館に来なくなってしまうという危険性ははらみ、無視できない問題である。

最後に、図書館に対する要望を聞いた。(第9図参照)(図書館についての具体的なイメージを持っていないせいか、特に低学年では、何にでも○をつける傾向があり、そのため全体に回答率が高くなっている。)予想通り、各学年とも“もっと近くにあるといい”“おもしろい本がたくさんあるといい”が多い。また、1年生では“映画会・人形劇”“ゲームや工作をして遊ぶ所”の希望が多く、図書館を、単に本を読むだけの場ではなく、広く遊びの場としてとらえていることがわかる。従って、



第9図 図書館に対する要望

図書館にそのような楽しい気軽な雰囲気をもたせ、その中で遊びを通じて児童と本を結びつけていく工夫がなされてもよいのではないだろうか。図書館員についての希望は、他に比べると少ないが、これは、まだ小学校低学年では公共図書館を実際に利用した経験のない者が多く、学校図書館にも専任の図書館員がいない状態であるから、図書館員の役割や仕事についての知識があまりないためもあるだろう。それでも、お話や読み聞かせよりは、まず、読書の相談にのってくれる人、おもしろい本を知っている人を求めており、それは読書好きの者において特に顕著にあらわれてきている。“その他”であったものは、サービスの内容よりも、施設に関するものが多く、例えば、“静かな所”“広い所”“借りなくても本が読める場所”を求め、“毎日、いつでもやっている”など、地域・家庭文庫の利用者がその不満を表現したと思われるものも多い。蔵書に関して、“マンガ”を望むものは1件だけであった。学校の図書室や学級文庫にはマンガはないから、図書館にはマンガはないものというイメージを持っているのかも知れない。

IV. 児童のための読書施設のあり方

A. 児童と読書施設とのかかわり

調査から明らかなように、児童の読書生活は読書環境によって大きく左右されている。児童をとりまく人々、児童のまわりにある種々の読書施設が、さまざまな形で、いろいろな面から、児童の読書に影響を与えている。人が読書好きになるかどうかは、児童期の読書環境によって決まると言ってもあながち言い過ぎではないだろう。

子どもは誰でも、手の届く所に本があれば必ず本を読むようになること、また、より身近にある読書施設ほどよく利用していることが実証された。前川恒雄は、日野市の図書館活動の実践から、日本人の読書と図書館利用について、(1)日本人は本を読まないのではなく、本が手近にあれば読む、(2)大多数の人は図書館が利用できる場所にあれば本を借りる、(3)図書館利用者の圧倒的多数は図書館ができたために本を読むようになった人である、ということ述べている。¹⁹⁾これは子どもについてもそのまま当てはめることができる。つまり、本を読まない子どもというのは、図書館がない、本が身近にないから“読めない”のである。従って、子どもに読書をさせるには、まず、身近に本のある環境を作らなければならない。子どものまわりに数多くの本との出会いの場を作り、そこに子どもが手を伸ばさずにはいられないような魅力ある本をたくさん置くことが必要なのである。そして、ここに読書施設の存在意義がある。読書施設を利用して多くの本を読むうちに、真の読書の楽しさを教えてくれる本に出会い、読書が好きになり、さらに積極的に読書施設を利用するようになる。家庭では、子どもの旺盛な読書欲を十分満足させるだけ本を買い与えることは容易ではないし、子ども自身がわずかな自分のこづかいで本を買うことは、まして困難である。読書施設は、そのような個人の力の限界を超越したものであり、利用に支えられてさらに発展していくのである。

いくつかの調査から、だいたい小学校3年生が、読書要求、読書量及び読書施設利用のピークであることがわかった。この時期は、ちょうど読書の楽しみがわかりかけてきた頃で、勉強もそれほど忙しくなく、読書の時間が多く持て、行動範囲も広がるため、読書施設の利用が多くなるものと考えられる。高学年になると、さらに行動範囲は拡大するものの、勉強が忙しくなり塾やおけいこなどで時間的余裕もなくなってくる。実際に、5・6

年生になると、文庫通いが塾通いにとってかわられ、文庫の利用者が激減するという例はよく聞かれる。低学年のうちに基本的な読書習慣をつけていない者は、ここで読書から離れてしまうのだらう。一方、低学年では、行動範囲が非常に狭く、地域の読書施設の利用者は歩いて来られる者に限られてしまう。この意味で、特に低学年においては家庭と学校の役割は重要である。

さまざまな読書施設の中で、全ての児童が等しく利用できるのが学校図書館である。この学校図書館を、児童は、学校の中の勉強のための教室の1つ、本のある教室というよりも、いろいろな読書施設の1つとしてとらえ、家庭での読書と同様に楽しみのための読書の場として利用している。現状では、資料を使って勉強するために利用されることは少なく、これは、そのための資料の不足、児童の能力の不足（現在の教育においてはそのような能力の育成が全くおろそかになっていることを反省する必要がある。）及び学校図書館の運営に原因があるように思われる。

また、今回の調査で、学級文庫の利用が非常に活発であることがわかった。同じ学校の中にあって、学校図書館より高い利用度を示しているのはなぜだろうか。これに関して考えられることは、まず第一に、学級文庫がより身近であること、堅苦しい感じがなく気軽に利用できること、そして、本の量が少なく自分の読みたいものが容易に選べること、また、本について児童間のコミュニケーションがあり、それによって興味を誘発されることなどである。学級文庫については、今まで軽視されがちであったが、その見直しをはかり、学級指導の中でより有効に生かされるべきである。ここで重要となるのが担任の教師であるが、現在のところ、まだ十分にその役割を果たし得ず、今後の活動の余地があるように思われる。

図書館へ行かない理由、あるいは、以前行っていたが行かなくなった理由として、“図書館が遠いから”が非常に多くあがっている。読書施設が少ないことを端的に示すものであろう。近くに読書施設があれば、その蔵書が少なく、週1回しか開いていなくてもそこを利用するが、近くに無ければ、わざわざ遠くまで出かけることはせず、本を読まないですませてしまうということもあると考えられる。また、高学年児童では“塾やおけいこで行く時間がない”、“一緒に行く子がいない”が少なからずある。これは一見別のことのように思えるが、実際は深い関係がある。“塾やおけいこに行く”ということは、

児童のための読書施設のあり方

その時間「図書館へ行かない」ことであり、それまで一緒に図書館へ行っていた友達にとっては「一緒に行く友がいけない」という事実となって現われるのである。児童は、親の読書態度や図書館利用経験に大きく影響を受けているが、このような「塾やおけいこ」に通わせるのも親であり、児童の読書施設利用に対して、親はプラスとマイナスの両面で重大な責任を負っていることを忘れてはならない。

B. 児童のための読書施設のあり方

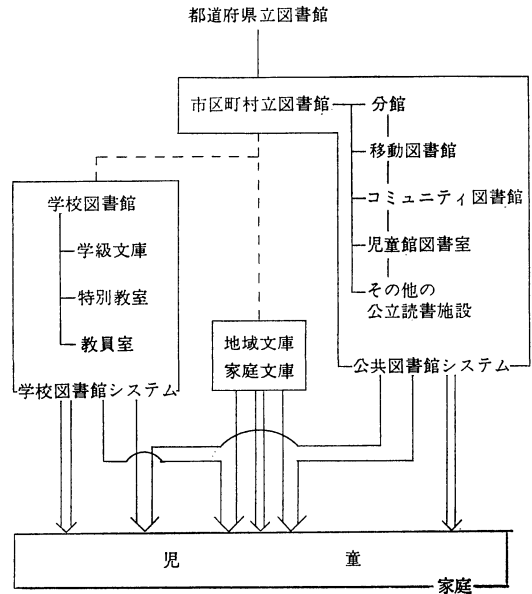
いつでも、どこでも、誰でもが本を自由に手にとることができるように、子どもの身近に本を提供し、読書の喜びを伝えるためには、ただ「ポストの数ほど図書館を」と言うだけではなく、地域の子どもの読書にかかわるあらゆる人々、施設が、まず、児童期の読書の重要性を十分に理解し、その必要性の認識の上にたって、連携、協力を進めていくことが必要である。そして、さまざまな読書施設が一体となり、1つのシステムとして有機的に機能していくことが理想である。しかし、現状では、それぞれの読書施設が勝手に活動し、ばらばらに児童にはたらきかけて、利用者の奪い合いをしている。これらの読書施設は、決してライバルなどではなく、共通の役割を担い、協力しあって活動すべきものである。しかしながら、その意味の正しい理解なしに安易な協力体制をつくることは、どちらかの負担にこそなれ、読書施設全体の発展にはつながらないだろう。協力は、読書施設それ自体のためではなく、利用者である児童に対するサービスを充実し、拡大するためのものであり、それぞれの読書施設がその本来の役割を十分に果たすことが前提となる。そして、各自の目的・機能の相似性と相違性を明らかにした上で、それぞれの機能や特徴を生かしながら、より合理的、効果的に共通の役割を果たして行こうとすることこそが、地域全体の読書施設のシステムを形成していくための第1歩であると思う。

以上のことをふまえながら、今後の児童のための読書施設の進むべき方向として、地域の読書施設のシステム化を考え、その可能性を探ってみたい。

1. 公共図書館及びその他の公立読書施設

公共図書館は、地域の全住民をサービス対象としている。従って、読書施設の地域システムの中心でもあり、地域の実状に則した奉仕計画を立案し、それを推進していくためのリーダーとなるべきである。

図書館とは、1つの建物（施設）を言うのではなく、中央館、分館、移動図書館からなる1つのシステムであ



第10図 読書施設の地域システム

る。そしてこれは、読書施設の地域システムの中にあって、1つのサブ・システムを形成する。(第10図参照) 第Ⅱ章で述べたように、現在、公立の読書施設でありながら、図書館法に基づかず、公共図書館と連携のない、児童館図書室、コミュニティ図書館などが存在するが、これらは公共図書館の末端のサービス・ポイントとして位置づけるべきである。施設の管理主体は異なっているが、その中の図書資料と職員は独立して、公共図書館のシステムに組み込まれ、システムの中を図書が縦横に流れ、全ての児童がどこでも平等なサービスを受けられるようにすることが望ましい。児童にとっては、どこの本であろうと、身近にあるほど良いのである。

公共図書館の全地域住民に対するサービスの一環として、地域の全児童を対象とするためには、地域内の児童を対象とする他の読書施設をもサービス対象とすべきである。そして、これを積極的に行うためには、公共図書館システムの中に、システム内で児童に直接サービスをする部門とは別に、システム外の他の読書施設に対するサービスを行う部門がなければならない。

また、これらの読書施設には、読書の好きな子が読書をするために自分の意志で自発的にやって来るのであるが、ここに来るのは一部の限られた者にすぎない。それ以外のもっと多くの児童、すなわち、読書施設へ来たく

ても来ることのできない者、読書に興味のない者、読書施設の存在を知らないためにそこに行くことすら考えつかない者達のことをも考えなければならない。システムの中だけにとどまらず、積極的に外に出て児童と接し、また親達に対してはたらきかけていくことも必要である。

さらに、公共図書館の館長は、公共図書館システムの責任者であると同時に、地域全体の読書施設のシステムの責任者であるから、図書館サービスの専門家であることが当然要求される。そして、末端のサービス・ポイントに至るまで、専門の児童図書館員が配置されるべきことは言うまでもない。これによってはじめて、地域システムのリーダーとしての活動が可能になるのである。

2. 学校

学校は、一定期間全ての児童が生活する場であり、全ての児童に本との接点を保障しうる場であって、地域システムの中の1つのサブ・システムをなしている。

学校図書館は、しばしばその活動の不振が叫ばれているが、これは、学校図書館の活用を必要としない現在の学校教育のあり方そのものからくと共に、活動の主体となるべき専任司書の不在により、学校全体の組織の中で学校図書館の位置づけが弱く不安定であることにも原因がある。まず、学校図書館を、学校の読書施設のシステムの中心として明確に位置づけた上で、活動の核として学校司書を配置することが必要である。

学級文庫は、児童の最も身近な読書施設として、また、学校図書館の学級分館の役割を持つものとして、もっと重視され活用されなければならない。児童の利用度の高さ、影響の大きさを考えると、その内容、質には十分留意し、学校図書館からの貸出で補うことも必要であろう。これは低学年において特に重要であり、学校図書館の読書センターとしての機能、すなわち、他の多くの読書施設と同様、児童の身近に本を提供し、基本的な読書能力、読書習慣を形成することを第1の目的とすべきである。この中で、学級担任は、児童の自由な読書をすすめ、それを見守り、時には相談にのり、学校図書館の専任司書は、その専門的知識と技術によってこれらの活動を援助していくのである。

そして一方では、各教科の特別教室にそれぞれの主題の基本図書が置かれ、教員室には教育関係の図書が置かれ、学習センター、資料センターとして、それぞれが学校図書館の分館の役割を果たす。このように、学校図書館システムには、まだまだ多くの発展の可能性があるの

である。

3. 地域・家庭文庫

地域・家庭文庫は、読書施設の貧しさから、住民の一種の自衛手段として生まれたものであり、読書施設の地域システムの中に正当に位置づけられるべきである。現在、文庫に対する図書の大量貸出など、公共図書館からの協力体制は進みつつあるが、これは逆に言えば、地域の公共図書館システムを整備すべきところを、それをしてしないで、住民の奉仕による文庫を援助してしまっていることになる。悪く言えば、図書館行政の怠慢であり、決して本来の姿ではない。しかしながら、文庫は単なる図書館の代用品ではなく、独自の機能を持ち、公共図書館とは質的に大きく異なる存在であり、地域の読書施設のシステムにとって、無くてはならないものになっている。

以上述べたように、地域システムを構成するそれぞれのサブ・システムの中において、まず、個々の読書施設がはっきりと位置づけられ、その機能を完全に果たした上で、サブ・システム間（公共図書館と学校図書館、公共図書館と地域・家庭文庫など）の連携・協力をすすめていくべきである。これについては、近年、具体的なレベルで多く論じられるようになったので、そちらに譲ることにしたい。

V. おわりに

本稿で提唱したような、地域の読書施設のシステム化は、現実に子ども達の置かれている読書環境を考えると、はるかな理想、夢のまた夢であり、現実には極めてきびしいと言わざるを得ないだろう。そこに、公共図書館員、学校図書館員の責任と寄せられる期待の大きさを感じる。

欧米の絵本や児童文学と同じように、日本の創作絵本や児童文学に、子どもたちが図書館を利用する場面が、ごく自然に描かれるようになるのは、いつのことだろうか。図書館が子ども達の日常生活の中にとけ込んで、遊びの中に“学校ごっこ”や“お店屋さんごっこ”と並んで“図書館ごっこ”が現われる日はやく来ることを願いたいものである。

最後に、本稿作成にあたり、御指導下さった慶應義塾大学文学部図書館・情報学科の高山正也助教授、並びに調査に御協力いただいた上郷南小学校の松山校長先生、田沼先生ほかの諸先生方に、ここに心から謝意を表したい。

児童のための読書施設のあり方

- 1) 塩見昇, 間崎ルリ子. 学校図書館と児童図書館. 東京, 雄山閣出版, 1976. (日本図書館学講座, 5) p. 8.
- 2) 日本図書館協会. 日本の図書館, 1980. 東京, 日本図書館協会, 1980. p. 18.
- 3) 日本図書館協会. 日本の図書館, 1965. 東京, 日本図書館協会, 1966. p. 8.
- 4) 日本図書館協会. 市民の図書館. 東京, 日本図書館協会, 1970. 151p.
- 5) 日本図書館協会の調査によれば, 専任または兼任で児童奉仕担当者をおいている図書館は, 全体の56%で, 担当者の児童奉仕経験年数は, 1年が20%で最も多く, 3年以内で64%を占める.
日本図書館協会図書館調査委員会. 「「児童奉仕についての調査」集計報告,」図書館雑誌, vol. 73, 1979. 2, p. 84-6.
- 6) 学校図書館法. 第2条.
- 7) 全国学校図書館協議会. 「調査報告, 小・中・高校図書館の実態,」学校図書館速報版, No. 905, 1979. 9, p. 1-5.
- 8) 児童福祉法. 第40条.
- 9) 「特集, 「コミュニティ・センター」と図書館,」図書館雑誌, vol. 74, 1980. 7, p. 322-42.
- 10) 日本図書館協会. 地域・家庭文庫の現状と課題; 文庫づくり運動調査委員会報告. 東京, 日本図書館協会, 1972. 69p.
- 11) 全国学校図書館協議会が毎日新聞社の研究委託を受けて, 小学校4年生以上を対象に毎年6月実施している.
読書世論調査, 1968年版-1980年版. 東京, 毎日新聞社広告局, 1968-1980. 「読書調査報告, 1-4,」学校図書館速報版, No. 944-947, 1980. 10-11.
- 12) 栗原嘉一郎. 「児童の読書形態と図書館利用; 公共図書館の設置計画に関する研究, 4,」日本建築学会論文報告集, No. 189, 1971. 11, p. 103-8.
栗原嘉一郎, ほか. 日野市の図書館設置計画に関する調査研究. 東京, 日本図書館協会, 1972. 56p.
図書館問題研究会東京支部杉並調査委員会. 杉並区立図書館登録者についての調査報告書; 図書館利用者の姿と新しい問題点. 東京, 図書館問題研究会東京支部, 1974. 90p.
名古屋市鶴舞中央図書館, 豊田工業高等専門学校藤谷研究室. 名古屋市における読書と図書館に関する調査報告書. 名古屋, 1975. 41p.
「天白調査」調査研究チーム. 天白図書館と地域社会. 名古屋, 名古屋市天白図書館, 1979. 107, 49p.
- 13) 石井敦, 前川恒雄. 図書館の発見; 市民の新しい権利. 東京, 日本放送出版協会, 1976. p. 27-8.

付録 児童の読書と読書施設に関する意識調査 調査票

どくしょ と としょかん についての ちょうさ

_____ ねん なまえ _____ 男・女

しつもんを よくよんで、あてはまるばんごうを ○で かこんで ください。

わからないことが あったら、先生に きいて ください。

しつもん 1

ア) あなたは、本を よむことが、すきですか。どれか 1つに ○をつけてください。

1. すき 2. ふつう 3. きらい

イ) あなたは、本を よんでもらったり、おはなしを してもらうのが、すきですか。どれか 1つに ○をつけて ください。

1. すき 2. ふつう 3. きらい

しつもん 2

ア) あなたは、本を かってもらいますか。

1. よくかってもらう 2. ときどき かってもらう
3. あまり かってもらわない

イ) あなたは、ともだちから 本を かりて よみますか。

1. よくかりる 2. ときどきかりる 3. かりない

ウ) あなたは、がっきゅうぶんこの本を よみますか。

1. よくよむ 2. ときどきよむ 3. よまない

エ) あなたは、がっこうのとしょしつの本を よみますか

1. よくよむ 2. ときどきよむ 3. よまない

オ) あなたは、いどうとしょかん「はまかぜごう」(バス のとしょかん)で、本を かりて よみますか。

1. よくかりる 2. ときどきかりる 3. かりない

カ) あなたは、じちかいのぶんこで、本をかりて よみますか。

1. よくかりる 2. ときどきかりる 3. かりない

しつもん 3

ア) あなたは、がっこうの としょしつで、どんな本を よみますか。あてはまるものに ○を つけて ください。いくつつけても いいです。

1. えほん 2. おはなし や どうわの本
3. ずかん 4. かがくの本
5. べんきょうの本 6. あそびの本
7. そのほか ()

♣ あと はんぶんです。もうすこし、がんばってね。♣

イ) あなたは、がっこうの としょしつの本が、もっと ふえて、かりられるようになったら、本を かりますか。どれか 1つに ○を つけて ください。

1. かりるとおもう 2. かりないとおもう
3. わからない

ウ) 上のしつもんで、「かりないとおもう」に ○を つけた人に ききます。どうして、がっこうの としょしつの本を かりないのですか。あてはまるものに ○を つけて ください。いくつでもいいです。

1. よみたい本が ないと おもうから。
2. がっこうの としょしつの本は つまらないから。
3. ほかの としょかんで 本を かりるから。
4. がっきゅうぶんこの本が あるから。
5. 本を よむのが、きらいだから。
6. そのほか ()

しつもん 4

ア) 5月に、かなざわとしょかんが できました。あなたは、かなざわとしょかんに いきましたか。

1. いった 2. いかない

イ) かなざわとしょかんに いったことのない人に、ききます。かなざわとしょかんに いってみたいですか。

1. いってみたい 2. いきたくない

ウ) あなたが、かなざわとしょかんに いかないのは、なぜですか。あてはまるものに ○を つけて ください。いくつでもいいです。

1. としょかんには、よみたい本が ないと おもうから。
2. いっても おもしろくない と おもうから。
3. とおくて、あぶないから。
4. 「いっては いけません」と いわれたから。
5. べんきょう や おけいこで いくじかんが ないから。
6. いっしょにいく ともだちが いないから。
7. つれていってくれる人が、いないから。
8. としょかんが、どこにあるのか、わからないから。
9. としょかんが、どんなところか、わからないから。

児童のための読書施設のあり方

ら。

10.本を よみたい と おもわないから。

11.そのほか ()

エ) あなたは、どんなとしゃかんが あると いいとおもいますか。

1.としゃかんが、もっと ちかくにあると いい。

2.おもしろい本が たくさんあると いい。

3.おもしろい本を おしえてくれる かかりの人が いるといい。

4.本を よんだり、おはなしをしてくれる人が いるといい。

5.えいがかいや にんぎょうげき を してほしい。

6.ゲームや こうさくをして あそぶところがある といい。

7.そのほか ()

しつもん4 つづき かなざわとしゃかんへ いった人
にききます。

オ) はじめて かなざわとしゃかんへ いったとき、だれ

といっしょに いきましたか。

1.ともだち 2.きょうだい

3.おとうさん か おかあさん

4.ひとりで いった

5.そのほか ()

カ) おとうさん や おかあさん と いっしょに かなざわとしゃかんへ いった人に ききます。おとうさん や おかあさんは 本を かりましたか。

1.おとなの本を かりた。 2.こどもの本を かりた。

3.本は かりなかった。

キ) いままで、かなざわとしゃかんへ なんかいくらい いきましたか。

1. 1～2かい 2. 3～5かい

3. 6～10かい 4. もっと たくさん いった。

ク) また、かなざわとしゃかんへ いきたいと おもいますか。

1.いきたい 2.いきたくない

これでおしまいです。どうもありがとう。